

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530625

研究課題名（和文） ひきこもる若者の社会的支援策の研究-ケースコントロール・スタディを用いて-

研究課題名（英文） The research of social support measures for HIKIKOMORI-The means of case-control study-

研究代表者

山本 耕平（YAMAMOTO KOHEI）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：40368171

研究成果の概要（和文）：

ひきこもる若者の社会的支援策の研究を行った。今回の研究では、若者のひきこもりが生じる社会的要因や生理学的要因に関する分析を、個々人の発達歴に焦点をあてるケース・コントロール・スタディ手法を用いて行った。研究対象は、居場所や就労支援の場、住まい等の実践の場で事例を選び、それぞれの事例に対し半構造化インタビューを実施した。結果、ひきこもりの背景となる支配的な価値観と、実践を展開する上で不可欠なアセスメント項目を考察することができた。

研究成果の概要（英文）：

It analysis social and physiological factors that cause HIKIKOMORI among youth, with the means of case-control study that focus on individual developmental history.

Persons who are being studied are supported at free spaces, work places, living places and so on. the research did semi-structured interview.

The result shows that dominant sense of worth that competitive society has causes the life difficulties that HIKIKOMORI have. It figures out assessment points that are necessary for supports.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000円	420,000円	1,820,000円
2010年度	800,000円	240,000円	1,040,000円
2011年度	1,100,000円	330,000円	1,430,000円
年度			
年度			
総計	3,300,000円	990,000円	4,290,000円

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ひきこもり， ケース・コントロール・スタディ， ポスト青年期 ， 発達史 ， 社会加 ， 韓日比較

1. 研究開始当初の背景

社会参加が困難な若者たちのなかでも社会的ひきこもり（以後、「若者のひきこもり」とする）は、この事実が我が国に特有に生じ

ていると指摘され、我が国の文化や家族力動との関わりで精神医学、臨床心理学等の研究者が研究課題としてきた。また、今日の若者政策との関わりで社会学や教育社会学領域

での研究が進められている。本研究では、発達保障の視座から若者がひきこもる意味を検討することに研究のオリジナリティを求め展開してきた。

2. 研究の目的

社会参加が困難な若者のなかでも非精神病性ひきこもり（社会的ひきこもり）の若者（思春期から35歳くらいまで）を対象とし、若者がひきこもりに至る初期要因でグループ化し、各グループにみる特徴に視点をあてた支援を展開する為のアセスメント項目を検討するとともに、彼らの自立を支援する実践体が活用できる初期介入及び継続支援アセスメントを検討し、就労を含む総合的な社会的支援策を提起する。

3. 研究の方法

(1)若者がひきこもる社会的背景に関する分析を進めてきた。現在ひきこもっている若者たちが生まれ育ってきた1960年代以降の社会における彼らの発達を規定してきた社会構造上の課題につき分析した。この分析に関しては、韓日の比較研究を行い、我が国の若者の生活と発達の背景につき検討を加えた。(2)社会構造上の分析を加えつつ、その社会的背景（社会的諸矛盾）が、学校・家庭・コミュニティにおける子どもや若者の生活を歪めてきた状況を、若者を対象とする半構造化インタビューを実施し、その結果をM-GTAにより分析した。そのインタビューにあたっては、個々人の発達歴に焦点をあてるケース・コントロール・スタディ手法を用いた。(3)ひきこもり初期要因と個との関わりに関し、STAIとGHQ-28を活用し、STAIの特性不安が非常に高い群と高い群及び、GHQ-28の各症状でハイリスク群にある者を抽出し、それぞれの語りとの関わりを関連させ分析を加えた。(4)上記の方法で導かれたひきこもる若者たちがそれぞれに獲得してきた社会参加困難性に視点をあて、当事者と実践に関するアセスメントの基本的な視座を検討した。

4. 研究成果

(1)若者のひきこもりと社会的背景に関する分析

若者のひきこもりが、我が国に固有の課題ではなく、我が国と同様の経済成長を遂げ、教育に競争が貫徹する東南アジアで共通して発生しているとの仮説の下に韓日比較研究を進めてきた。

ひきこもりが生じている背景を考える時、現在、ひきこもり下にある若者達（40歳以下の若者）が生まれ育ってきた1960年代以降の社会システムと若者の発達を関連させ検討する必要がある。本研究では、これを、若者

達の語りから考察し分析を加えた。その結果、高度経済成長による社会構造の変化が、若者の発達上の危機を生じさせている事実が明らかとなった。それが、いわゆる教育を貫徹する競争主義により“普通への囚われ”である。

高度成長が低成長へと転じた1970年代半ば、若者に多く生じたのが自我漏洩症候群である。また、同時期に不登校や学校内暴力や家庭内暴力が高じてきた。

鍋田は、1970年代に具体的なテーマが存在する古典的神経症でなく、不全型神経症が増加したと指摘するⁱ。研究代表者は、この不全型神経症を、示す「漠とした不安」状況と捉え、その中核は漠然たる緊張感と戸惑いであるとする。漠とした不安のなかで、若者たちは他者とかかわり、結合することから回避し、仲間を得る力を失い、同年齢集団への参加が制約され、次第に社会的に孤立するⁱⁱ。

この当時の我が国の状況が1997年のIMFショック後の韓国で生じ、今やひきこもりが深刻な課題となりつつある。今日、韓国で明らかになっていることが調査のなかで明確となった。韓国のニート・ひきこもり支援の社会的企業であるYooja Salonでは、その若者達のことを“無重力青少年”表現する。この無重力化の過程を“社会的衝撃に基づく軌道離脱”“家族内要因に基づく持続的ストレス”“内部的（生理的）性向の漸進的発現”に求めるⁱⁱⁱ。我が国における漠とした不安を持つ若者の出現は高度経済成長との関わりで捉えることが妥当である。

2009年1月に行った韓国の若者を対象とするインタビューにおいて、次の二つの語りがあった。

まず、若者達は、韓国における入試制度を「大きな問題である」と感じつつも、現状では、この入試に適応しなければ韓国社会で生きることができないとの思いを強く持っている。

さらに、考試院（コシウォン）で閉じこもり、勉強する生活が韓国の国家公務員試験受験時には必要となるのは当然であり、大学受験時に学校に過適応するのは理解できるとの考えを示すものもいた。その者は、隠遁型ウェットリを肯定的な意味で捉えていた^{iv}。

これらの研究成果から、現時点の韓国における青少年問題の中心的課題は家出青少年や貧困家庭の青少年の課題であるが、確実にひきこもりが中心的な課題となりつつあるのではないかと推察することができた^v。

(2)若者達が語る学校・家庭・コミュニティでの競争と“普通への囚われ”

若者のひきこもりを分析するにあたって、彼らが自身の発達と取り組んできた三つの場、つまり“学校（園）”“家庭”“地域（職

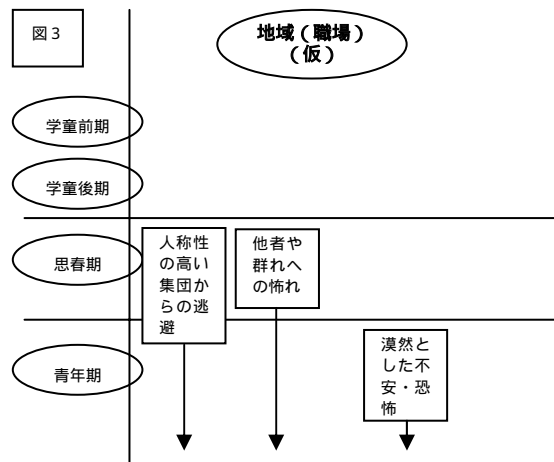
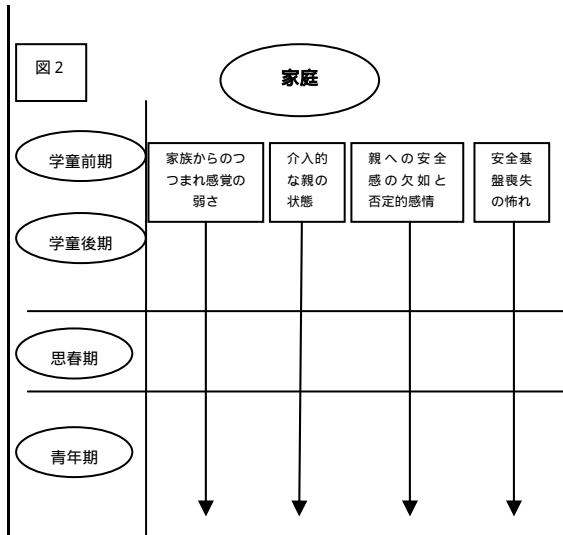
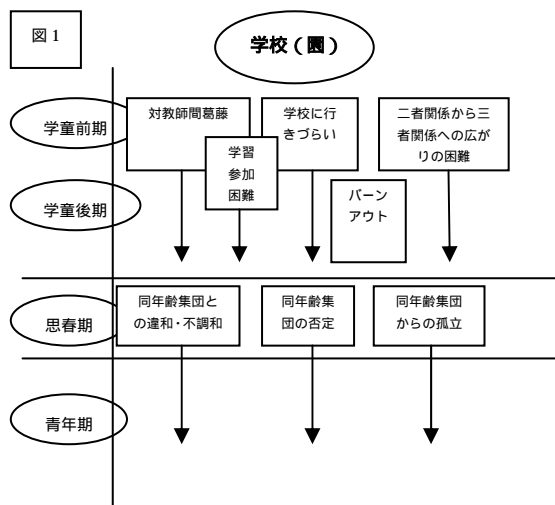
場) ”での発達がどのように脅かされてきたのかを探る必要があった。

今回の研究で、若者のひきこもりが生じる核となる価値観 - それは、その三つの場における若者の発達への能動的活動を脅かすばかりか発達欲求をも削いでしまう価値観 - を、M-GTA による分析を行い “普通” への囚われと恐怖” に求めた。

学童初期には、友達関係を樹立することの困難さや友達を遮断していたとの語りを見た。集団に “普通” に適応することが困難ななかで “自分のことを悪く言っているという考え” が強まり “なじめない友達は極力遮断” した。さらに、発達段階が高まるなかで、各々の発達課題や能動的発達への取り組みからの回避が生じ “他者や群れへの怖れ” や “同年齢集団との違和・不調和が高まり、人称性の高い集団から回避している事実が確認された。また、その一方で、同年齢集団への過適応が生じている語りもみた。それは、 “人目を気にする八方美人だった” “一人で給食を食べる方が落ち着いたが近くの子と食べていた” や、 “友達に無理に合わせようとしていた” といった語りである。この過適応は、学童中期の自己を語るなかでより明確に語られた。

この価値観と “家庭” との関わりであるが、学童中期まででは “家族からの包まれ感覚の弱さ” として、それ以降では、 “親への安全感の欠如と否定的感情” や “介入的な家族の状態” を確認する語りとして確認された。この背景には、親自身に競争社会との関わりでの “普通” への囚われと恐怖” が存在するのではないかと考えられた。

さらに、 “職場 (地域)” との関わりでは、 “人称性の高い集団からの回避” が特徴的な語りをみた。(図1-図3)



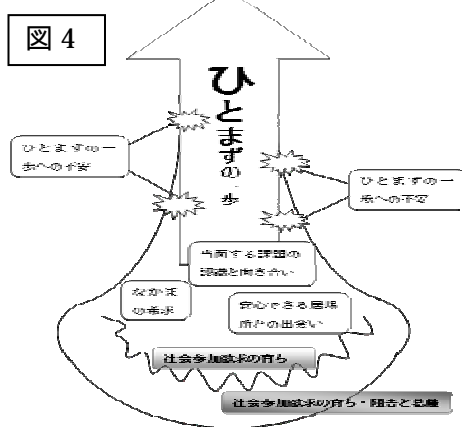
(3) ひきこもる若者にみる社会参加への過程

次に、ひきこもり後に生じる価値観転換であるが、青年期の主たる発達課題は、労働参加による人格や能力の発達にある。ただ、ひきこもり後すぐに就労参加が可能となるのではない。その前の重要な段階として、若者達の語りのなかに “ひとまずの一步への不安” を確認することができた。 “ひとまずの一步の不安” とは、自己に生じている社会参加への要求 (発達要求) と対峙、つまり自己の価値観との対峙であり、それは不安や葛藤を伴う。 “外に出なければいけない” という思いが生じるが、緊張が高まり一步を踏み出すことができない状態を若者達は語る。その不安と向き合い “ひとまずの一步” を踏み出す。そのなかでは、居場所等の集団に参加する者は、集団所属感や集団での “包まれ感覚” を獲得し、新たな参加のあり方を見出すことが可能なる。

しかし、この “ひとまずの一步” は、 “普通” への囚われと恐怖” と向き合う仕掛けを準備することにより可能となるものである。その一つが “安心できる居場所との出会い” であり、そこで、彼らは “社会参加欲求の育

ち・阻害と葛藤」と出会う。

また、自己と親との関係が「親の持つ弱さの客観視」や「親に対する感情の柔和化」が彼らの中に育つとともに、親自身の「育ちと受容」が育つなかで変化し、親と若者達が共に育つなかで、新たな関係になることを確認した。(図4)



(4) 初期要因と特性不安、メンタルヘルスのハイリスク状況と語り

ひきこもりの初期要因が明確な事例の内、23事例を対象に、初期要因との関わりで、特性不安や状態不安さらにメンタルヘルス状況と語りとの関わりを分析する為 STAI と GHQ-28 を実施した。

結果、初期要因に「社交不安による恐怖や回避」さらに「発達障害からの集団参加困難」「不適切な養育から生じる依存や他者拒否」等々の発達過程における依存から自立への諸課題が存在する時、その語りに、「親への安全感的欠如と否定的感情」が顕著であることが確認できた。

親への安全感的欠如は、親が、その若者の発達過程の課題を受容することが困難であるが故に生じるものであることが語りから考察された。

初期要因に不登校がある場合で、特性不安が特に高い事例と高い事例に共通して「安全基盤の喪失の恐れ」が見られた。これらの事例の中には、実際に親が離婚や DV にあった事例もあった。また、不登校事例で特性不安が特に高い事例では「学習参加困難」の語りを確認できた。

STAI の結果、特性不安・状態不安ともに特に高く、かつ GHQ-28 におき全症状がハイリスクであった事例では、その語りにも「社交不安による恐怖や回避」を確認し、初期に「親への安全感的欠如と否定的感情」や「同年齢集団との違和・不調和」をみた。

また、初期要因に「発達障害からの集団参加困難」がある場合、「対教師間葛藤」や「学習参加困難」さらに「介入的な親の状態」を語りにみた。さらに、「不適切な養育から生じる依存や他者拒否」が初期要因と考えら

れる事例では、「親への安全感的欠如と否定的感情」が顕著であった。

こうした結果を基に、アセスメント項目を検討した。

(5) ひきこもる前の予防的アセスメント(ハイリスク状況の発見)及び安心してひきこもる支援の場や家族アセスメントの視座と項目

これを、本研究は、case-control study 手法を用い、当事者の語りからアセスメント項目を導きだす方法をとった。しかし、この方法には、研究上の限界がある。それは、第一に、研究対象の語りには過少報告あるいは過大報告といったバイアスがかかり、客観性が欠如する点である。第二に、本研究で用いた case-control study は、本来では、「症例」と性別や年齢などの要因が似た「対照(control)」群を選び検討しなければならないが、本研究では非常に不十分である。

こうした限界を念頭におきつつ、今後、case-control study に基づくアセスメントを進める視座と項目を検討する為、本研究で得られた成果を整理する。

まず、第一に、本研究で症例として選んだ「居場所」ならびに「就労支援の場」に参加する事例のほとんどの事例で、「再ひきこもり予防」「安心してひきこもることができる場と実践のアセスメント」「家族アセスメント」の三領域のアセスメントが必要であることが明らかとなった。

第二に、再ひきこもり予防に関しては、「本人アセスメント項目」として本人が持つ生理学的要素(基礎障害がもたらす再ひきこもり因子)と、本人の対人・対社会的な力の要素(他者や群れへの恐れや人称性の高い集団:限定された空間への参加力、なかまの希求力)を項目化することが必要と考えられた。

第三に、支援の場のアセスメントに関しては、その場が有する実践哲学が実践方法を規定する事実を確認した。実践哲学に関する検討では、韓国における HAJA センターや Yooja Salon の哲学や我が国のいくつかの居場所実践に主体形成に必要な原則を見ると考えた。今後の研究において、異なる哲学を有する場をコントロール群として選び、それぞれの実践やアセスメントを実証的に検討する必要がある。

第四に、家族アセスメント項目であるが、本研究では、A若者サポートステーションで行われている家族教室と家族相談の来所者の内、協力依頼できた12名の親(11家族)を対象とし、若者の属性と家族の精神的健康及び自我特徴と自己認識の特徴につき検討を加えた^{vi}。

家族アセスメントは、「家族からの包まれ感覚」「介入的な家族に対する感情の柔和化」

「親自身の育ち」等につき分析することが必要であるとの結果を得た^{vii}。

第五に、本研究で仮説的に定めたアセスメントを居場所において用い、初期介入及び再ひきこもり予防介入、家族介入を実施した。しかし、この2011年度の研究に関しては、試験的に行った場が一か所であることと、事例数が限られている為、今後に残された課題が多い。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

著者名: 山本耕平・斎藤真緒・財団法人京都市ユースサービス協会他, 報告書表題: 『ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立に関する研究報告書』, 査読: 無, 発行年: 2011, 総ページ: 98

著者名: 山本耕平・Lee Insoo・安藤佳珠子, 論文表題: 「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって 若者問題に関する韓日間比較調査から」雑誌名: 『立命館産業社会論集』, 査読: 有, 巻: 46, 号: 4, 発行年: 2011, ページ: 21-42

著者名: 山本耕平, 論文表題: 「若者のひきこもりを精神保健福祉課題としてどう同定するか」, 雑誌名: 『立命館産業社会論集』, 査読: 有, 巻: 45, 号: 1, 発行年: 2009, ページ: 15-33

〔学会発表〕(計11件)

発表者名: 山本耕平, 発表表題: 青少年の暴力について, 学会名等: 日韓交流教育フォーラム, 発表年月日: 2012年3月15日, 発表場所: ソウル市立青少年職業体験センター(韓国)

発表者名: 山本耕平, 発表表題: ひきこもりの社会的要因 韓日比較検討の視座, 学会名等: 韓日ひきこもり研究会, 発表年月日: 2011年8月24日, 発表場所: ソウル市立青少年職業体験センター(韓国)

発表者名: 安藤佳珠子, 山本耕平, 発表表題: ひきこもる若者支援へのアセスメント要素の検討 ピアスタッフとのケースコントロール・スタディから, 学会名等: 日本精神障害者リハビリテーション学会, E-2, 発表日時: 2010年10月23日, 発表場所: 浦河町総合文化会館(北海道)

発表者名: 安藤佳珠子, 鴻原崇之, 山本耕平, 発表表題: ピア支援の効果測定項目の実証研究をめぐって ひきこもりに限定して, 学会名等: 日本病院地域精神医学会, D-2, 発表日時: 2009年9月18日・19日, 発表場所: 和歌山市民館(和歌山県)

〔図書〕(計1件)

著者名: 山本耕平, 出版社名: かもがわ出版, 署名: ひきこもりつつ育つ 若者の発達危機と解き放ちのソーシャルワーク, 発行年: 2009, 総ページ数: 190

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

「立命館大学 山本耕平研究室」

<http://www.ritsumei.ac.jp/~kohei-y/lab/index.html>

山本耕平, 2010, 「生きづらいと訴える若者の声を聞く」, NHKラジオ第2放送文化講演会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 耕平 (YAMAMOTO KOHEI)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号: 40368171

ⁱ鍋田泰孝, 2003, 「『ひきこもり』と不全型神経症 特に対人恐怖症・強迫神経症を中心に」, 『精神医学』45(3): 247-53

ⁱⁱ山本耕平, 2009, 「若者のひきこもりを精神保健福祉課題としてどう同定するか」『立命館産業社会論集』45(1): 15-33

ⁱⁱⁱYooja Salon, 2011, PPT 『ニート、ひきこもり青少年に向きあう韓日共同研究懇談会』(山本耕平, 2012, 『韓国の若者が抱える困難と支援に関する調査報告書』pp.30-34 に日本語訳掲載)

^{iv}山本耕平, 2011, 「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって 若者問題に関する韓日間比較調査から 第1報」『立命館産業社会論集』46(4)

^v山本耕平, 2012, PPT 「ひきこもる若者を社会との関わりで考える」および、李忠韓, 2012, PPT 「韓国社会における「適応」に対する悠自(Yooja)の哲学と実践」(主催: 立命館大学人間科学研究所、公開シンポジウム 『“ふつつ”への適応からユニークな参加の創造へ』レジュメ集)(日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号21530625)

「ひきこもる若者の社会的支援策の研究 ケースコントロールスタディを用いて」)

^{vi}山本耕平, 2011, 『ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立に関する研究報告書』

^{vii}山本耕平, 2011, 『ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立に関する研究報告書』